

ぼちぼちいこか

皇居東御苑 年寄り笑うな行く道だ

伴 勇貴

四時半になると、東京湾から上る太陽の朝日が強烈に部屋の奥まで差し込んでくる季節になった。高台たかだいにあるマンションの二八階の東部屋なので遮光カーテンがなければ、有無を言わず起こされる。眩まぶしいのに加えて、かなり暑くなる。

目が覚めたらカーテンを開け、それからガラス戸を開け、ベランダに出て朝日を浴びながら思いっきり深呼吸するのが一日の初めである。都心でも空気が淀んでいないので、朝はとくにすがすがしい。筑波山が遠くに大きく見える。天気が良いれば房総の木更津あたりの石油タンク群も見える。

数日ぶりに気持ちよく晴れたもので、突然、皇居東御苑に行こうと決めた。数日間、ちよつと歩きが少なく、それを取り返そうとも思ったからだ。

皇居は広い。都心の真ん中にこんなに緑濃い地域があるのかと改めて驚かされる。だいたい五キロメートル×五キロメートル（二四六六万平方メートル）の広さがある。

グーグル・アース (Google Earth) の衛星写真を見ると一目瞭然りようぜんである。「東御苑」は写真の矢印が指す約二一平方メートルの堀に囲まれた右上の部分で、午前九時から午後四時半まで一般に無料で開放されている。休日は、原則、月曜日と金曜日。

昔、ここには「天守閣」や「本丸」があった。「松の廊下」もあった。この季節の見所は本丸付近より一段下



二十年近く行っていな
 かったが、一週間ほど前、
 ニュースで「東御苑」の
 はなしょうぶ
 花菖蒲が見どころになっ
 ていると聴いて、行って
 みようと考えていた。

皇居東御苑略図



- | | | | |
|----------|---------|-----------|---------------|
| 1 富士見櫓 | 9 展望台 | 17 楽部庁舎 | 25 二の丸庭園 |
| 2 蓮池濠 | 10 緑の泉 | 18 桃華楽堂 | 26 ハナショウブ |
| 3 江戸城本丸園 | 11 大番所 | 19 書院部庁舎 | 27 二の丸休憩所 |
| 4 松の廊下跡 | 12 白鳥濠 | 20 梅林坂 | 28 大手休憩所 |
| 5 富士見多聞 | 13 同心番所 | 21 天神濠 | 29 三の丸尚蔵館 |
| 6 石室 | 14 百人番所 | 22 諏訪の茶屋 | 30 皇居東御苑管理事務所 |
| 7 本丸 | 15 汐見坂 | 23 都道府県の木 | 31 皇宮警察本部 |
| 8 本丸休憩所 | 16 天守台 | 24 二の丸雑木林 | |



がった低地に造られた「二の丸庭園」で、その入口付近の雑木林とさらに下がった
 ところにある池の周りの花菖蒲が素晴らしい。
はなしょうぶ
ぞうきばやし

<http://www.jiyu-kobo.co.jp>

平日の朝、都バスで九段下まで行き、そこから歩いて「平川門」から一番乗りで入った。そして苑内を隅から隅まで歩き回った。

「東御苑」への入口は二つの門であり、

その一つが「平川門」である。これは

太田道灌（一四二三〜一四八六年）の頃か

らあり、当時、門前は平川村と呼ばれる一

帯で、そこから付いた名前だと言う。この

門は江戸城の良（丑寅：北東）の方向、

つまり陰陽道で鬼が出入りすると信じら

れている鬼門の方向に当たり、城内の罪人

や死人を出すのに使われたため「不浄門」

とも呼ばれていたという。

本来なら、こんないわれのある門からは入りたくはないのだが、あまり団体見学者が使わず混まない上に、今の自宅からの交通の便利が良いので使った。それに

「不浄門」という名前とは裏腹に、大奥女中たちや御三卿の登城口でもあったと

いうから、そんなに気にすることもないとも思った。

江戸城の北西にあるのが「北桔橋門」である。太田道灌時代は城の正門の橋だったようだが、徳川幕府になってからは、本丸に近い門のため、濠を深く石垣は堅固にし、さらに撥ね上げ橋とし、それを通常は上げていたという。なお、「桔」（きつ）という字には「堅くしまった実を付ける草木、きつく締まる棒」といった意味があり、「桔槔」（きつこう）：「槔」は高く上がる棒の意味）という「撥ねつるべ」を意味する。多分、そこから「桔橋」を「はねばし」と読ませたのだろう。

陰陽五行（いんようごぎょう）説に基づいて自然現象を説明し人間の吉凶を判断するもの。陰陽二つの気の盛衰により万物の生成の変化を説く陰陽説と、万物を支配する元素として水火木金土の五つを考え、その盛衰で宇宙万物の変転を説く五行説とが融合したもので、それによって自然循環、災害、政権交代などが説明された。

田安、一橋、清水の三家。江戸中期、將軍家と御三家（尾張、紀伊、水戸の三家。それぞれ徳川家康の第九子、第十子、第十一子を祖とする。）との関係が疎遠になったため、八代將軍徳川吉宗は自分の二子に御三家に進ずる將軍家と密接な関係を持つ家柄として一家を構えさせ、九代將軍家重もこれにならった。田安家は吉宗の第二子、一橋家は吉宗の第四子、清水家は家重の第二子を祖とする。

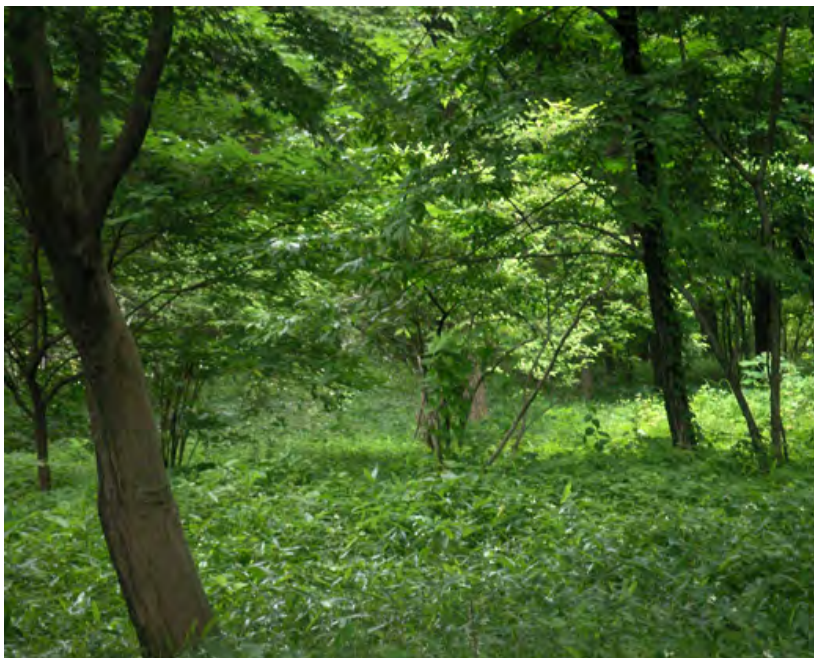


そして東にあるのが「おおてもん大手門」である。「おおて大手」とは「城の正面、表口」という意味で、文字通り、これは徳川家康が命じて新に造らせた江戸城の正門である。

「ひらかわもん平川門」から入り、隅から隅までナツプザックを背負い、案内図を片手に歩き回り、十一時頃には腹が減ったので木陰のベンチに座って持ってきた梅干し入りの握り飯を食べ、ポットの茶を飲み、一服し、十二時前には日差しが強く暑くなったので、この正門の「おおてもん大手門」から出て帰路に着いた。約一万六千歩の散歩だった。

昭和天皇の発意で武蔵野のおもかげ面影を再現させるために昭和五十七年（一九八二年）から数年かけ、表土ごと移植する表土移植工法によって作られたという雑木林ぞうきばやしは見事に完成していた。昔に見たときには、まだなんとなく人工的な雰囲気が漂っていたけれど、歳月を経て様々な樹木と下草との自然の調和を感じさせるようになっていた。野草も生い茂り、まったく都心にいることを忘れさせてくれた。

こんな中を駆け回って遊んでいた子供の頃を思い出した。





それに比べると、非常に有名になった花菖蒲はなしょうぶの方は確かに綺麗なことは綺麗だけが、ありふれ、やや物足りなさを覚えた。何よりも人で溢あふれていたのには参った。まばらだった人がだんだん増え、花菖蒲はなしょうぶのところには人の群ができていた。

狭い道を占拠する人々——狭い道に高価なデジタル一眼レフを三脚で据えて断固として動こうとしない六〇、七〇歳代の何人もの男性。狭い道を塞ふさぎ、大声で綺麗だと叫びながら先を争って携帯電話のカメラやコンパクトデジタルカメラで写真を撮りまくる六〇、七〇歳代の女性の集団。これにはさすがに閉口した。

やり過ぎせば何とかゆっくり鑑賞できるかと思っ振り返ったら、同じような夕イブが次から次とやってくるのが見えた。

もう早々に、この場から逃げ出すしかなかった。改めて僕よりもやや年配の老人パワーほうじゃくぶじんというか傍若無人はなしょうぶに圧倒されて花菖蒲はなしょうぶを観賞するどころではなかった。

化野念仏寺 あだしの

「子供じゃないだろう！」と注意するのも、文句を言うのも堪えたものの、不快感に残って引きずっていた。しかし、戻りの道、再び雑木林の中を歩み始めたら、だんだん気分が治まってきた。

そして突然、「子供しかるな来た道だ。年寄り笑うな行く道だ。」という言葉が浮かんできた。同調する面がある言葉だが、現実はそうでもない。

目に余る行動などに直面すれば幼い子供でも叱るし注意するし、親と一緒にあれば、その親を叱り注意する。若者も中年の大人に対しても言わずもがなである。うっかりすると逆ギレされて何をされるか分からないと自覚しているのに、ほとんど反射的にやってしまう。ところが僕より年上の正真正銘の老人になると途端に対応に躊躇してしまう。叱ることも注意することもできず、怒ることもできず、嘲笑 ちやうしょう することもできず、ただ不快感を覚えながら悲しくなってしまう。それでいて、結構、それが残って尾を引いて、やり場がないものだから困ってしまう。

しかし、雑木林 ぞうきはやし 中の小道を歩いていたら、それでも良いんじゃないかという気分 ちゆうちゆう に襲われた。

本当にいろいろな樹木や野草が好き勝手にゴチャゴチャに育っていた。漢方薬などには使われるものの独特の強い匂いがあった庭には嫌われるドクダミ、無毒なのにドクイチゴ（毒莓）とかへビイチゴ（蛇莓）、それらと可憐なツククサ（露草）やアカマンマ（赤飯：イヌタデ 犬蓼）などと一緒に育っている。僕の好物のミョウガ（茗荷）も灌木 かんぼく の横で頑張っている。

それでいて全体として調和の取れた心和む雰囲気 こころなげ が醸し出されていた。手入れが行き届き見事な花を咲かせている花菖蒲の庭園とは対照的だった。

素直に「子供しかるな来た道だ。年寄り笑うな行く道だ。」という言葉が心にしみ込んできた。

もう五年以上も前になると思う。京都の嵯峨野さかのの
 かいわい 境界をゆつくり散策した。すつかりお上りさん気分
 で、有名な竹林から化野念仏寺あだしのねんぶつでら、そして観光客向
 けの洒落た店にも足を運んだ。嵐山では修学旅行気
 分みやげやで土産屋をひやかした。天竜寺や気に入っている
 おおこうちさんそう 大河内山荘にもきちんと行った。その時に手にした
 あだしのねんぶつでら 化野念仏寺に置いてあった一枚の紙に、この言葉
 が書かれていた。

豆腐

信仰は お豆腐のようになることです
 豆腐は 煮られてもよし
 焼かれてもよし 揚げられてもよし
 生で冷奴で ご飯の菜によし
 湯豆腐で一杯 酒のさかなによし
 柔くて 老人 病人の お気に入り
 子供や 若い者からも 好かれる
 男によし 女によし
 貧乏人によし 金持によし
 平民的であって 気品もあり
 上流へも好かれる
 行儀よく切つて 吸物となり
 精進料理によし
 握りつぶして味噌汁の身となり
 家庭料理に向く
 四時 春夏秋冬 いつでも使われ
 安価であつて ご馳走の一つに数えられ
 山間に都会に …… ドコでも歓迎せられる
 貴顕や 外客の招宴にも 迎えられ
 簡単なる学生の自炊生活にも 喜ばれる
 女は特に 豆腐のようでなければいかぬ
 徹した人は 豆腐の如く柔くて しかも形を崩さぬ
 味がないようで 味があり
 平凡に見えて 非凡。

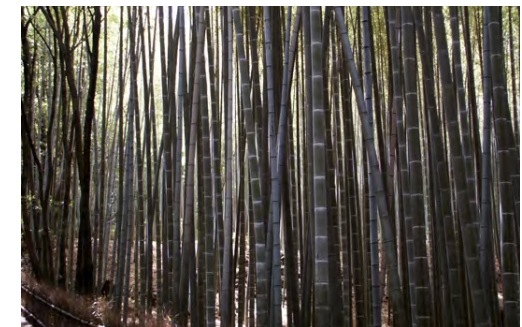
(原文のまま)

俗世間 つもりちがい十ヶ条

- 一、高いつもりで 低いのは 教養
- 二、低いつもりで 高いのが 気位
- 三、深いつもりで 浅いのは 知識
- 四、浅いつもりで 深いのが 欲
- 五、厚いつもりで 薄いのは 人情
- 六、薄いつもりで 厚いのが 面の皮
- 七、強いつもりで 弱いのは 根性
- 八、弱いつもりで 強いのが 我
- 九、多いつもりで 少ないのは 分別
- 十、少ないつもりで 多いのが 無駄

わらわれて わらわれて
 えらくなるのだよ。
 しかられて しかられて
 かしこくなるのだよ。
 たたかれて たたかれて
 つよくなるんだよ。

小供しかるな来た道だ。
 年寄り笑うな行く道だ。



その時は、たしか「俗世間 つもりちがい十ヶ条」が面白いと思ってもらったのだが、改めて身の回りの山積みを整理している中で、この紙を見つけた時は、むしろ、この「子供しかるなきた道だ。言葉の方が心に引っ掛かった。

どこかで読んだことがあることを思い出した。気になると、その気持ちを止めることができないう性分である。書棚の心当たりの本を探しまくり、ついに岩波新書の永六輔著「大往生」えいろくすけ だいおうじょうだったことを見つけた。一九九四年発行の本。その三十八頁にあった。

子供叱るな来た道だもの

年寄り笑うな行く道だもの。

来た道行く道二人旅

これから通る今日の道

通り直しのできぬ道。

これが全文らしい。愛知県犬山の寺の門前にあった掲示板から写したもので、みょうこうにん妙好人の言葉として有名だと書かれていた。みょうこうにん妙好人とは「優れた人。とくに浄土真宗の篤信者。とくしんしゃ一般に無名で学問のない人でありながら信心の境地では優れて高いところに達していた人」といった意味である。

この本には、この言葉を巡る内輪話が紹介されていた。

これを黒柳徹子さんに読ませたら……………

「アラ、年寄りは笑わなきやいけないのよ。笑う年寄りの方が長生きして呆けないんですって……………」

そしてもう一回読み直して、

「ごめんなさい。そうよね、年寄りを笑っちゃいけないわね」

円満解決。

とあった。